

情報組織化研究グループ2025年6月月例研究会
(連続企画:図書館資料組織化の“三大ツール”
の現状を考える;分類) 2025年6月21日

日本十進分類法

NDCの今後に向けて

分類調査2023の結果とNDCの今後に向けて

日本図書館協会 分類委員会
中井 万知子

内容

- はじめに—組織化ツールとしてのNDC
- NDCの改訂推移
 - 概観
 - 8版から9版へ
 - 9版から10版へ
- 10版から次版へ
 - 基本的な考え方
 - 改訂方針策定への課題
- おわりに—NDC100周年に向けて

はじめに—組織化ツールとしてのNDC

- 組織化“三大ツール”の中での「日本十進分類法」(NDC)の特徴
 - 一番古い・・・1929年の第1版刊行から、100周年まであと4年
 - 生成物が記号ながらリアル・・・目に触れる、空間を形づくる
 - ローカル性が強い
- 図書館自体との類似性
 - いつもそこにあることが基本
 - 蓄積と変化のせめぎ合い
- 2025年は、2014年12月のNDC新訂10版刊行から10年経過。改訂への助走に入りつつある

NDCの改訂推移

NDCの改訂は、どのような条件のもとで、どのような考え方で行われてきたのか。
新訂8版以降を中心に。

概観

- 1928年、森清が「和洋図書共用十進分類表案」を『圀研究』に発表
- 1929年、間宮書店から『日本十進分類法: 和漢洋書共用分類表及索引』第1版刊行
- その後森の個人著作として、訂正増補第5版(1943年増刷)まで刊行
- 1948年に日本図書館協会分類委員会が発足し、NDCの制定を引き継ぐ
- 1950年7月に新訂6版(索引編は12月刊)、1961年4月に新訂7版、1978年5月に新訂8版刊行
- 原著者の森は1986年に引退、1995年8月に新訂9版、2014年12月に新訂10版を刊行し、現在に至る
 - 参考: 藤倉恵一「日本十進分類法(NDC)の百年・その分水嶺」2024年7月月例研究会 <https://josoken.digick.jp/meeting/2024/202407.html>

8版から9版へ

- 8版(1978刊)の改訂方針⇒「7版の場合と同様に抜本的な改正を行なわない。従って、構成や記号の改変は極力さける。」(8版序説 p.13より。7項からなる「基本的な構想」の第1項)
- 9版(1995刊)の改訂方針⇒「全国書誌の分類を念頭におく展開」(9版解説p.xxviiiより。7項からなる「改訂方針」の第1項)
 - 「(前略)一館単位の書架分類を基本とするNDC8版の方針では適当ではなく、全国書誌を念頭に置き、詳細に分類する方針をとった。」
 - ただし、3項めには、「NDC8版の継続性の維持」も掲げる
- MARCの進展が背景(1981年にJAPAN/MARCの頒布開始)
 - NDCについても、機械可読版であるNDC・MRDF8を1989年に刊行、改訂作業もデータベース上で行う方針とした

9版における理論的整備

- 「中間見出し」の導入
 - 区分特性の明確化
- 別法注記等、注記の整備
- 補助表の整備
 - 「地理区分」、「言語区分」を補助表として備える。「海洋区分」の追加
 - 「本表編」及び「一般補助表・相関索引編」の2分冊に
- 用語の見直し
 - 8版までの「類目表(1次区分表)」を「第1次区分表(類目表)」に変更
 - 補助表に対する「助記表」の呼称をやめる
- 十進記号法への留意
 - 第2次区分表(綱目表)の記号を従来の3桁から2桁に
- 改訂時に多くの意見や批判が寄せられた

9版から10版へ

10版(2014刊)の改訂方針(序説p.26-27より)

- 1) 9版の改訂方針を踏襲する
 - ①NDCの根幹に関わる体系の変更はしない。ただし、情報科学(007)と情報工学(548)の統合の可能性を検討
 - ②書誌分類をめざす。出版点数が多い箇所は必要に応じて展開
- 2) 新主題の追加を行う
- 3) 全般にわたって必要な修正・追加などを行う
 - ①論理的な不整合はできるだけ修正、②用語の整備、③他のツールの情報の取り込み(BSH4版、NDLSH等)、④分類作業が行いやすく、また利用者にも分かりやすい分類表をめざす、⑤細目表と相関索引の用語、分類記号の整合性を図る
- 4) NDC・MRDF9の本表と相関索引を統合し、分類典拠ファイルを作成する

10版改訂とその背景

- 1995年刊行の9版は、目録機械化はフォローしたが、インターネットには間に合わなかった
- 10版はIT状況の深化を反映。007(情報学: 情報科学)を展開し、548(情報工学)との切り分けを明確にした。一方で別法を設定することで、いずれかに統合することも可能に
- 補助表の整備(一般補助表および固有補助表の明確化)、序説と使用法の分離、用語解説の新設、分冊構成の変更など、方針どおり9版の路線を引き継ぎ、その充実をはかった
- 別法を多数設けるといった追加的な方策も
 - 小林康隆「『日本十進分類法新訂10版』の改訂、そしてこれから」2015年4月月例研究会 <https://josoken.digick.jp/meeting/2015/201504.html>

10版刊行後の推移

- NDCのLinked Data形式化に係る共同研究
 - 2015～16年に国立国会図書館電子情報部からの呼びかけにより共同で実施
 - 8版および9版のRDFファイル(NDC-LD)を作成、2019年3月から分類委員会ウェブサイトダウンロード可能にした
 - <https://www.jla.or.jp/committees/bunrui//tabid/789/Default.aspx>
- 小林康隆編著；JLA分類委員会監修『NDCの手引き：「日本十進分類法」新訂10版入門』の刊行(2017年)
- 「新訂10版簡易版」の刊行(2018年)
- NDC・MRDF10の刊行(2020年)
 - 結局、従来のデータ形式のまま
- 本版は2024年4月で9刷、刷ごとに正誤表を公表していたが、2020年段階で訂正作業はほぼ終了

10版から次版へ

改訂に向けての基本的な考え方と方針策定に向けての課題を示す

基本的な考え方

- 100年にわたり、日本の図書館の共通の基盤として受容されてきた分類法の基本的な枠組みを維持しながら、主題の変化に対応した柔軟性のあるアップデートを行う
 - Discipline(基本分野)の維持、Topicの位置づけ
 - 「道案内」(⇔書架分類)として、「データ」(⇔書誌分類)として、分類がいつも身近にあるように
- 2015年以降、10年で社会はどう変化したか
 - 国際紛争・テロ多発、COP21「パリ協定」、トランプ政権(第1期)、中国の影響力、地球規模の激甚災害の頻発、平成から令和へ、新型コロナ流行、ウクライナ侵攻、ガザ侵攻、トランプ政権(第2期)
 - 少子化、MeToo運動、性多様性、性加害、コンプライアンス強化、生成AI
- ⇒新主題、用語の見直しの対象はかなりありそう。ただし、Disciplineを揺るがすかと言え、そういうものでもない

改訂方針策定への課題①

- 「書誌分類をめざす」ことの意味
 - ⇒(1)主題分析の結果を反映する詳細な分類
 - ⇒(2)MARCに付与される標準的な分類
 - ⇒(3)検索システムで活用できる分類データ
- 9版改訂時の目的は(2)で、その前提として(1)が求められた。10版改訂方針策定の段階で「主題検索に向けた分類表という要請に応えうるものを志向すべき」という金中委員長の見解が示され、(3)が浮上
 - 金中利和「日本十進分類法新訂第10版の作成について—JLA分類委員会の改訂方針」『図書館雑誌』Vol.98, No.4, 2004.4. p.218-219
- 2023年の調査結果を見る限り、分類記号からの検索だけでなく。階層検索、検索結果の絞り込み、再検索など各種機能が、多くのOPACに備わっていることが確認された
- 進展はありつつも、内在的な課題にどう取り組むか？

改訂方針策定への課題②

- ターゲットの洗い出し
 - 改訂作業期間の短縮のねらいもあり、ポイントとなる箇所をある程度絞り込めるか
(例)
 - 補助表の形式区分
 - 図書館. 図書館情報学(01)
 - 植物学(47)、動物学(48)の区分
 - 医学(49)、特に神経科学. 精神医学(493.7)の扱い
 - 家政学. 生活科学(59)、特に手芸(594)等
 - ……
- これまでのレビュー、今回の調査結果等から課題として浮かびあがっているものはあるが、既存の記号、助記性等との兼ね合いで対処の可能性が
あるか検証が必要

改訂方針策定への課題③

- 電子ファイル化、提供方式に係る課題
 - NDC-LDの経験を活かしきれていないことへの反省
 - 8版、9版のLDファイルはCC-BYで提供したが、出版事業はJLAの重要な財政基盤
 - ではどのような形態がよいのか？
- 現時点での想定では、2025年度中に委員会での検討とある程度の試行を経て、2026年度早期に改訂方針案をとりまとめて公表し、意見を求めたい

おわりに—NDC100周年に向けて

- 来るべき100年めの2029年のみでなく、その前後の5年程度を事業期間と位置づけ、100周年記念事業を企画する(以下はあくまで机上の案)
 - NDC次版改訂方針の策定と改訂作業への着手
 - 雑誌の特集、関連出版物の刊行
 - イベントの開催
 - 記念ロゴなどデザインの公募
 - NDCにちなんだゲームの制作
 - ⇒ほかにもアイデアをお寄せください
- 図書館界全体のご協力をいただけるよう、今後呼びかけを行っていきます

N D C

ご清聴ありがとうございました。

今後ともご協力、どうぞよろしく申し上げます。

ぜひご意見をお寄せください。

宛先: bunrui@jla.or.jp